

英語論文のアブストラクトに関する一考察

日本語話者と英語話者の傾向の差異に着目して

藤原隆史

導入

学術論文において、アブストラクトの果たす役割は小さくない。Swales (1990)をはじめとして、Hartley & Benjamin (1998)、Santos (1996)、Shahla (2015)、Swales and Feak (2009)、Talebzadeh et al. (2013)、Tseng (2011)らが同様の指摘をしている。アブストラクトが重要であるのは、論文の質を見極めるための有効な手段となるからである(Hartley & Benjamin, 1998; Swales, 1990; Swales & Feak, 2009)。その一方で、アブストラクトの研究は多いとは言えず(Swales, 1990; Santos, 1996)、特に非英語話者によるアブストラクトの研究はさらに少ない(Shahla, 2015; Talebzadeh et al., 2013)。こうした背景から、本研究の目的は以下の二点である。第一に、英語話者(Native Speaker = NS)と非英語話者(Non-Native Speaker = NNS)が書いたアブストラクトには差異があるのか。第二に、差異があるとすれば、それは何なのか、の二点である。また、この研究を通して、非英語話者のアブストラクトライティングに有用な示唆をもたらすことが最終的な目的である。

先行研究

アブストラクト研究は、ジャンル分析の一分野に位置づけることができるであろう。具体的には、English for Specific Purposes (ESP)の下位分類である English for Academic Purposes (EAP)の一つのジャンルと考えられる。アブストラクトは学術論文の要約であるため、簡潔に伝えるための語彙や文章構成が必要であるとされている(Swales, 1990; Swales & Feak, 2009; 田中, 2000)。また、Swales and Feak (2009)はアブストラクトを3つのカテゴリー、すなわち、Research article abstracts (RAs)、Conference abstracts (CAs)、PhD dissertation abstracts (DAs)に分類している。さらに、中村(1989)や田中(2000)はアブストラクトの下位分類として、指示的抄録(Indicative abstract)と報知的抄録(Informative abstract)を示しており、著者自らが書いたものを特に著者抄録(Author's abstract)と呼んでいる。

アブストラクトの分析方法としては、Swales (1990)や Santos (1996)による Move 分析が代表的である。Move 分析とは、テキストに複数の構成素(Move)を認め、それらを見ることで論の展開を理解することができるというものである。Santos (1996)は、アブストラクトは5つの Move によって構成されているとしている。その5つとは、Move 1-Situating the research, Move 2-Presenting the research, Move 3-Describing the methodology, Move 4-Summarizing the results, Move 5-Discussing the research であると述べている。また、Swales and Feak (2012)によれば、これら5つの Move は順番に、Background(B), Aim(A), Method(M), Results(R), Conclusion(C)と表現できている。

分析対象

本研究では、国際語用論学会(International Pragmatics Association = IPRA)の第14回及び第15回大会に提出されたアブストラクトを分析対象とした。内訳は、日本語話者によるものが30編、英語話者によるものが30編の、合計60編である。各アブストラクトは一人の著者によって書かれたもののみを選び、書き方の一貫性を担保している。また、著者が英語話者かどうかを確かめるために、著者の所属機関及び学歴を参照し、非英語圏の大学等に所属の場合は学歴を優先的な判断材料とした。国際語用論学会のアブストラクトを採用した理由は、日本語話者の参加者が多いこと、国際語用論学会では人文社会学系の発表が多く、論文数が多い人文社会学関連分野のアブストラクト研究に資することができると考えたためである。

分析方法

前述の Santos (1996)と Swales and Feak (2012)の Move 分析を踏襲し、二つの観点からアブストラクトを分析した。すなわち、5つの Move がどのような順序で用いられているか(例: B-A-M-C, A-B-M-R-C)、最初と最後の Move がなんであるかの二点である。

結果と考察

用いられた Move 構成の種類の数としては、NNS が20種類、NS が14種類であり、全体では30種類であ

る。NNS が 20 種類、NS が 14 種類であったことから、NNS のアブストラクトの方が若干多様性に富んでいる。この結果をもたらした理由が何であるのかについては今後の研究に譲るが、母語の影響を受けている可能性が示された。また Move 構成の内訳については、NNS のアブストラクトにおいて B-A-M-C が 9 編、B-A-M と B-A-M-A が各 2 編、A-B-A-C, A-B-C, A-B-M-C, A-B-M-R, A-B-M-R-C, A-M-A-B-M-R-C, A-M-B-R-C, A-M-R, B-A, B-A-B, B-A-B-A-C, B-A-B-M, B-A-B-M-R-C, B-A-C, B-A-M-R, B-A-M-R-M, B-M-R-C が各 1 編であった。NS のアブストラクトにおいては、B-A-M-C が 8 編、B-A-C と B-A-M-R-C が各 4 編、A-B-M-C が 3 編、B-A-M が 2 編、A-B-A-R-C, A-B-M-C-A, A-M, A-R-M-C, B-A-M-A-M-A-B-M-R, B-M, B-M-A-B-C, B-M-A-C, B-M-C が各 1 編であった。B-A-M-C が全体の 17 編に見られたこと、さらに、これに Results を加えた B-A-M-R-C が 4 編あったことから、B-A-M(R)-C という Move 構成が基本となり得ることが分かった。この構成は全体の 35% を占めていた。この基本形は、国際語用論学会のアブストラクトや人文社会系学会へ提出されるアブストラクトの執筆において、EAP 的見地から有意義な示唆をもたらすものと思われる。

最初と最後の Move については、NNS、NS とともに全てのアブストラクトが Background($n=45$)もしくは Aim($n=15$)から始まっていたことから、研究の背景と目的を最初に述べるのが必須であることが再確認されたと言えよう。また、全体として Conclusion で終わる傾向が見られた($n=43$)が、NNS で最後の Move を Conclusion にしているものは 19 編、NS で 24 編であり、NS の方が若干少なかった。この傾向の差異について統計的な有意差はなかった(カイ二乗検定: $\chi^2=2.052$, $df=1$, $p=.015$)ものの、NNS のアブストラクトにおいて Conclusion を最後の Move として採用していないものについては改善の余地があることが示唆された。その他、NNS のアブストラクトにおいて Method で終わるものが 4 編、Results で終わるものと Aim で終わるものが各 3 編ありバラエティーに富んでいたが、それとは対照的に、NS のアブストラクトでは Method で終わるものが 4 編見られた以外は概ね Conclusion が最後の Move として採用されていた。

結論

本研究は、国際語用論学会に提出されたアブストラクトが B-A-M-C という基本形を持っていること、Background 及び Aim から Move が始まり、特に NS のアブストラクトにおいては Conclusion で終わる傾向が強いことを示した。また、本研究の課題としては、サンプル数が十分とはいえないこと、Move 構成について、Move の種類の断定が曖昧な場合が散見されたことなどが挙げられる。さらに、Swales and Feak (2012)でも指摘されているように、何らかの実験とその結果を含む Result-driven abstract と、学問的知識とそこから導かれる演繹的結論を取り扱う Summary abstract の性質の違いをどう捉えるかも問題となるため、今後はこの点も考慮に入れていく必要がある。

References

- 田中潔 (2000). 『手ぎわよい科学論文の仕上げ方—(付)初心者べからず集 第2版』 共立出版, 東京.
- 中村幸雄 (1989). 「講座論文と抄録の書き方(5)」 『情報の科学と技術』 39 巻 9 号, pp. 353-360.
- Hartley, J., & Benjamin, M. (1998). An evaluation of structured abstracts in journals published by the British Psychological Society. *British Journal of Educational Psychology*, 68, 443-456.
- Santos, M. B. (1996). The textual organization of research paper abstracts in applied linguistics. *Text*, 16(4), 481-499.
- Shahla, S. (2015). A structural move analysis of abstract[s] in electronic engineering articles. *International Journal of Research Studies in Language Learning*, 4(4), 69-80.
- Swales, J. M. (1990). *Genre analysis: English in academic and research settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swales, J., & Feak, C. B. (2009). *Abstracts and the writing of abstracts* (Michigan series in English for academic and professional purposes). Ann Arbor, Mich.: University of Michigan Press.
- Swales, J., & Feak, C. B. (2012). *Academic writing for graduate students: Essential skills and tasks* (3rd ed., Michigan series in English for academic and professional purposes). Ann Arbor, Mich.: University of Michigan Press.
- Talebzadeh, H., Samar, G. R., Kiany, R. G. & Akbari, R. (2013). Steps to a successful abstract: A comparative genre analysis. *The International Journal of Humanities of the Islamic Republic of Iran*, 20(3), 1-25.
- Tseng, F. (2011). Analyses of move structure and verb tense of research article abstracts in applied linguistics journals. *International Journal of English Linguistics*, 1(2), 27-39.

Data

ABSTRACTS of 14th International Pragmatics Conference. Issued by International Pragmatics Association. 2015, Antwerp.

ABSTRACTS of 15th International Pragmatics Conference. Issued by International Pragmatics Association. 2017, Belfast.